

2012年1月6日

## 博士学位論文審査報告書

大学名 早稲田大学  
研究科名 人間科学研究科  
申請者氏名 石田 真弓  
学位の種類 博士（人間科学）  
論文題目 がん患者遺族に対する集団精神療法の検討  
**A study of the group psychotherapy for the bereaved who lost family members with cancer**  
論文審査員 主査 早稲田大学教授 野村 忍 博士（医学）（東京大学）  
副査 早稲田大学教授 熊野 宏昭 博士（医学）（東京大学）  
副査 早稲田大学教授 鈴木 伸一 博士（人間科学）（早稲田大学）  
副査 埼玉医科大学教授 大西 秀樹 博士（医学）（横浜市立大学）

日本人において最も多い死因は悪性新生物（がん）であり、全死亡者のおよそ3人に1人はがんで死亡している。遺族にとって、その死別はストレスフルなライフイベントであり、死別を経験することにより、死亡率の上昇をはじめ、精神・身体・行動面に様々な影響を及ぼすことが報告されている。

本研究の目的は、本邦で最も多い「がん患者遺族」に焦点を当て、死別経験後に何らかの苦悩を抱え、医学的な援助を必要とした者を対象に、その苦悩について詳細に調査し、適切な精神療法プログラムを開発し、その効果を検討することである。

対象は、「遺族外来」としてがん患者遺族の診察を行う、本邦唯一の医療機関である埼玉医科大学国際医療センター精神腫瘍科を受診した遺族である。本遺族外来は、がんによって身内を亡くした遺族に対し、その心理的苦悩を軽減させるための精神医学的・心理的援助を行うことを目的とした診療を行っている。なお、本研究は埼玉医科大学国際医療センター倫理委員会および早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承認を得て実施した。

本論文は、全8章から構成され、第1章ではこれまでに報告されている遺族に生じる様々な問題について概観し、がん患者遺族に対する精神医学的・心理学的支援の必要性について論じている。

第2章では、先行研究の問題点や限界点をふまえ、本研究の目的と臨床的意義を論じた。

第3章の研究1では、遺族外来受診者51名の特徴について、詳細な診療録にもとづいた後方視的調査を行い、その結果、女性の受診患者が多いこと、初診時にうつ病の診断を満たす者が約4割に認められたことを明らかにした。また、研究2では、遺族外来を受診したうつ病の症例検討を行い、死別反応による症状とうつ病の症状の相違点を明確にし、う

うつ病に対する精神医学的診断・治療の重要性を指摘した。

第4章の研究3では、遺族外来受診患者21名を対象としてその心理的苦悩について詳細な診療録に基づいた調査を行った。逐語録から心理的苦悩に関する内容分析を行い、その特徴を明らかにした。その結果、その心理的苦悩は、①後悔、②怒り、③記憶、④孤独、⑤不安、⑥絶望に分類された。特に、がん遺族に特徴的であったのは「後悔」と「(つらい)記憶」と考えられた。そして、このような心理的苦悩に関しては、遺族のがんの経過に関する誤った理解や否定的な認知が関係していることが明らかになった。

第5章の研究4では、以上の結果と先行研究をふまえ、がん患者遺族に対する心理的支援に適した精神療法の検討を行った。その結果、現状への適応力を意識した介入を集団精神療法の中で行うこと、介入手法として認知行動的技法を用いることが考えられ、集団精神療法プログラムを開発した。その内容は、一回90分、全5回から構成されるもので、心理教育、認知療法、問題解決療法などの技法と参加者によるグループディスカッションを含んでいる。

第6章の研究5では、遺族外来受診者10名を対象として上記集団精神療法プログラムを用いた介入を実施し、通常治療群9名と比較検討した。介入前後で各種心理検査を行い、精神健康度、抑うつ気分、不安、Quality of Life(QOL)などを測定した。その結果、介入群では、抑うつ、怒り・敵意、不安、QOLなどが改善するという結果を得た。通常治療群では、有意な変化は見られなかった。本集団精神療法プログラムを用いた介入を実施し、参加者の心理的苦悩を軽減させ、抑うつ状態を改善したことは、QOLの改善と同時にうつ病の予防に有用であると考えられた。

第7章の研究6では、本集団精神療法プログラムに参加した症例の検討を行い、がん患者遺族に対して適切な介入を行うことで、心理的苦悩や抑うつが改善し、気づきを得ながら、否定的認知が変容され、行動範囲が広がるなどの変化が認められることを示した。

これらの研究を通して、がん患者遺族として医学的援助を求めた者に対する適切なアプローチとして、①精神疾患(特にうつ病)の有無の確認、②がんの経過に関する誤解の確認と正確な医学的知識の提供、③がんの経過に関する本人の否定的認知の確認とその変容の必要性が示唆された。また、これらを踏まえた集団精神療法プログラムは、その介入前後で抑うつ、怒り・敵意、不安などが改善されることが示され、認知の変容が促され、遺族の苦悩が軽減している可能性が示唆された。これにより、本集団精神療法プログラムの実施可能性と臨床的有用性が確認された。本研究は、本邦で最も多いことが推測されるがん患者遺族に対し、適切な援助を検討した研究であり、今後のがん医療における遺族ケアに貢献することが期待される。

なお、本論文(一部を含む)が掲載された主な学術論文は以下のとおりである。

[1] Ishida, M., Onishi, H., Wada, M., Wada, T., Wada, M., Uchitomi, Y., Nomura, S.: Bereavement Dream? –Successful antidepressant treatment for bereavement-related distressing dreams in patients with major depression, Palliative and Supportive Care,

Vol.8, No.1, pp.95-98 (2010)

[2] Ishida, M., Onishi, H., Wada, M., Tada, Y., Ito, H., Narabayashi, M., Sasaki, Y., Nomura, S., Uchitomi, Y. : Psychiatric disorders in patients who lost family members to cancer and asked for medical help: Descriptive analysis of outpatient services for bereaved families at Japanese cancer center hospital, *Japanese Journal of Clinical Oncology*, Vol. 41, No.3, pp.380-385 (2011)

本論文は、がん患者遺族の心理的苦悩と抑うつ症状の改善に向けた、集団精神療法のプログラムの開発とその効果検討を行ったものである。遺族外来受診者を対象とした調査により、その心理的苦悩の特徴を明らかにし、適切な支援方法として集団精神療法に認知行動的技法を加えたプログラムを開発した。遺族外来受診者を対象として、上記集団精神療法プログラムを実施することにより、参加者の気分や QOL の改善、心理的苦悩の軽減がみられた。このことは、臨床現場において苦悩する遺族に対する効果的な支援が可能となることを示した優れた研究成果である。将来的に、厳密な比較対照試験による効果検討を行うことが期待されるが、現時点では稀有なアプローチの方法論を示した点で高く評価される。将来的に多くの臨床現場で、このような支援が実施され、多くの遺族の心理的苦悩の改善に資することが期待される。

以上の結果より、本審査委員会は、石田真弓氏の学位申請論文「がん患者遺族に対する集団精神療法の検討」は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上